



FUTABA JOURNAL

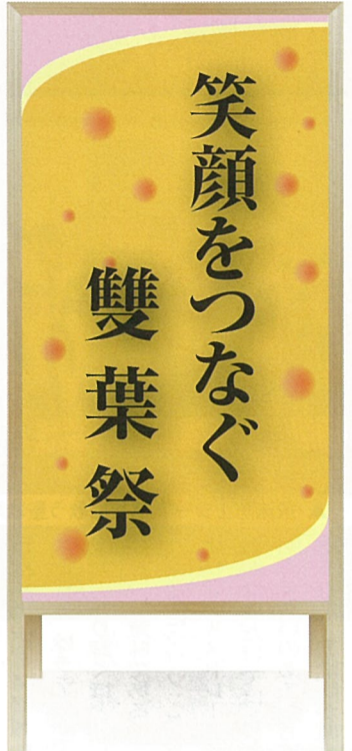
静岡市葵区追手町10-71
静岡双葉学園
新聞部
電話(054)271-3254
印刷所 ササキデザイン社



▲ フィナーレで一つになる生徒

今回の双葉祭はコロナ禍の中で開催が危ぶまれたが、無事に九月十九日(土)と二十日(日)に開催された。スローガンに「LOOP」を掲げ始めた双葉祭は、「人と人を結ぶ笑顔溢れる幸せな場所となつてほしい。そして今できる最高の形で、皆の記憶に残るものにしてほしい。」という願いが込められている。(前号の双葉祭実行委員長のインタビューより)

今回の双葉祭は「LOOP」を掲げ開催された。様々な制限の中で生徒達の工夫と、成長する姿が見られた。



今年度の双葉祭は、感染対策に様々な工夫が見られた。来校者は事前に登録した保護者に限定された。また入り口にはサーモカメラが設置され、一人ずつ検温が行われていた。さらに生徒を通して配布された健康記録表を提出した。入校できなかった保護者、OG、入学希望者のために「オンライン双葉祭」が行われた。また、講堂でのパフォーマンスは高校2・3年生、事前に予約している方のみ限定での公開となった。それ以外の生徒は六階に用意されたスクリーンを通してパフォーマンスを視聴する形となった。中継を担ったのは、メディア班である。大きなカメラを肩に乗せ、舞台の脇から角度を変えて映し、臨場感の溢れる映像を届けた。

高校3年生の有志は、石の展示、夏祭り、謎とき、美術選択者の二人によるライブペイントを行った。それぞれ工夫した展示で人気を集めていた。例年、高3生の有志は飲食の出店をしており、それを楽しまれていた来校者の方や後輩も多かった。しかし今年度はコロナ禍での出店は難しく、断念した。後輩たちに何か別の形で楽しんでほしいと、このような展示が計画された。今回の双葉祭は前例がない中で、

六月初旬、各部活の準備の様子が撮影された。それぞれの部活動の良さが最大限引き出せるよう、部員との会話や交流を大切に取材が行われた。双葉祭当日は、講堂発表の入場者数を制限する為、高1以下の生徒は六階で同時中継で視聴した。講堂では三台のカメラを駆使しながら撮影が行われた。カメラの映像を切り換えるスイッチャーや、1kgのカメラを一時間近く持ちながら撮影するカメラマン、それぞれの役割を全うした。生配信を観に行った生徒は「臨解なのか、どうしたら皆さんに楽しんでいただけたかを考えるのもとても大変で、沢山話し合いました。準備期間から当日まで、何度も試行錯誤を繰り返しました。

今年度の双葉祭実行委員長である井上和さんとインタビュをした。Q1 双葉祭当日に苦労したことは。A1 今年度はコロナの影響で制限が多く掛かっている状況だからこそできる新しい挑戦をしてきました。先が見えず、何が正しいかは。Q2 生徒や来校者の皆様にメッセージを。A2 今年度は様々な困難があつたからこそ人と人との繋がりを大切に、各々の無限の可能性を生かした唯一無二の双葉祭にしたいという皆の願いが強い結びつきをもつて一つになり、「LOOP」に込めた願いを叶えることができました。双葉祭に携わって下さった全ての方々の御協力のおかげで今年も無事に双葉祭を終えることができました。心より感謝いたします。有難うございました。

高3有志は「Haunted Mission」謎解きゲームが開催された。まず最初に、高3生によって作成されたゲーム

場感溢れる映像のおかげで講堂で見られなくても満足だった」と語った。十月九日(金)にフイナリー準備の様子を編集した動画を200名で全校に配信された。生徒一人一人に焦点を当てた作品で、生徒の頑張りや葛藤がよく伝わるものであつた。メディア班の活躍に心から感謝したい。

美術選択者の二人によるライブペイントがピロティにて行なわれた。動物や植物などをモチーフにした迫力ある絵で、通り行く人は、皆立ち止まっていた。

高3東組の有志は「石の個展」と題して、各々が持ち寄った石とそれまつわるエピソードを展示した。先生方のお気に入りの石も展示されており、生徒達の興味を引いていた。教室内には、石を使って川を表現した装飾が施され、印象的な空間が創られていた。

一年半前の池袋暴走事故を覚えていたのだろうか。高年齢者が運転する車に母親二人がはねられて死亡した事故である。悲惨な事故を引き起こした被告。彼が高年齢者であること、そして逃走の恐れがないことから在宅起訴となった。これに対して世間では、彼が国を代表するエリート所謂「上級国民」であつた為に逮捕されなかつたとの不確かな情報が渦巻いた。▼司法上の逮捕されない理由があるにせよ、家族を突然失われた遺族はその現実を受け入れることはできないだろう。父、夫という存在意義も奪われた遺族は今も被告の厳罰化に向けて活動し続けている。しかし、十月に行われた初公判ではその思いを踏みにじるかのように被告は事故を車の故障の為に無罪を訴えた。その姿に反省の色は見えなかつた。これまでの幸せを突然奪われた遺族、未来への希望に満ち溢れていた被害者の気持ちを考えていたたまれない。▼自分がいつ被害者にも加害者にもなりうる交通事故。まずは、高年齢者による事故を減らす為、あなたの身近にいる高年齢の方に免許の自己返納を促してほしい。このような遺族被害者を無くす為に、一人一人が交通ルールと向き合い直したい。

「石の個展」の模様。高3東組の有志は「石の個展」と題して、各々が持ち寄った石とそれまつわるエピソードを展示した。先生方のお気に入りの石も展示されており、生徒達の興味を引いていた。教室内には、石を使って川を表現した装飾が施され、印象的な空間が創られていた。

一面担当 真唯
二・三面担当 咲良・静
四面担当 真奈

「石の聲」
一年半前の池袋暴走事故を覚えていたのだろうか。高年齢者が運転する車に母親二人がはねられて死亡した事故である。悲惨な事故を引き起こした被告。彼が高年齢者であること、そして逃走の恐れがないことから在宅起訴となった。これに対して世間では、彼が国を代表するエリート所謂「上級国民」であつた為に逮捕されなかつたとの不確かな情報が渦巻いた。▼司法上の逮捕されない理由があるにせよ、家族を突然失われた遺族はその現実を受け入れることはできないだろう。父、夫という存在意義も奪われた遺族は今も被告の厳罰化に向けて活動し続けている。しかし、十月に行われた初公判ではその思いを踏みにじるかのように被告は事故を車の故障の為に無罪を訴えた。その姿に反省の色は見えなかつた。これまでの幸せを突然奪われた遺族、未来への希望に満ち溢れていた被害者の気持ちを考えていたたまれない。▼自分がいつ被害者にも加害者にもなりうる交通事故。まずは、高年齢者による事故を減らす為、あなたの身近にいる高年齢の方に免許の自己返納を促してほしい。このような遺族被害者を無くす為に、一人一人が交通ルールと向き合い直したい。



▲ 入り口に設置されたサーモカメラ



▲ 右から双葉祭実行委員長の井上和さんと副委員長の石上莉子さん

双葉祭実行委員長へのインタビュー

高3有志への支援

東日本への支援

華やかに彩られた校内

石の個展

石の聲

マに

9月19日(土)、20日(日)に雙葉祭が行われた。今年はコロナ禍での開催であったが、どの部活動も努力と様々な工夫によって、来校者を魅了した。

聖歌隊



▲ 飛沫防止シート越しに歌う聖歌隊

聖歌隊は、トーンチャイムとハンドベルの演奏と聖歌四曲の発表が行なわれた。テーマである「Gloria」はラテン語で、栄光、光り輝くほど美しいという意味である。「天使にラブソングを」オリジナルメロデーでは、厳かな曲だけではなく、明るく勢いのある曲も披露された。聖歌隊が歌う聖歌はとても美しく、観客は聞き入っていた。

ハープ部



▲ 息の合った演奏をする部員達

今年のハープ部のテーマは、「展覧会の絵」であった。今年は新型コロナウイルスの影響で、限られた時間の中で練習となった。その中でも、曲が展開していくたびに変化していく音色、部員三十四名の息の合った演奏が来校者を魅了した。また、部員全員の写真や高2の部員が心を込めて作った花の飾りにも来校者は見入っている様子であった。



演劇部



▲ あきを呼びとめる小雨

演劇部は、「雨間、交差点にて。」を上演した。この劇は、脚本家の方に今回の雙葉祭の為に書き下ろして頂いた世界に一つだけの作品である。劇中の小雨と朝子の心の成長を通して、講堂を不思議な世界へと引きこむ温かな空気で包んだ。



▲ 笑顔で踊る中一生

吹奏楽部は校庭で、全校生徒へのアンケートから作成した「FESTER」というランキングの順に演奏を行った。息の合った演奏は勿論、中一生によるダンスや高2生による圧巻のソロパートなど、終始目の離せないパフォーマンスを披露した。二日目は小雨の降る中での発表となった。しかし傘を差すよう呼びかけるなど、司会の機転と思いやりで、会場に笑顔が絶えない、雙葉祭二日目の開幕を盛り上げる発表となった。

吹奏楽部

競技かるた部



▲ 個人戦の本かるた

競技かるた部は、部内で個人戦を行った。最初の十五分は暗記、一人一人独自の暗記法で試合へと臨んでいた。生徒の札を取る速さに来校者の方は見入っていた。



化学部



▲ サイエンスショーの様子

化学部は、例年同様、二日間で計八回、中一から高2まで学年ごとのサイエンスショーと班別研究の内容の展示発表を行った。サイエンスショーは、結果を見せる前にクイズを行ったり、反応が起こる原理を分かりやすく説明しており、誰もが楽しめるものとなった。

創作ダンス部



▲ 迫力のあるダンス

ダンス部は、「TOY」をテーマに様々なダンスを披露した。観客が曲に合わせて手拍子する様子も見られ、一体感のある空間が創り上げられた。最後は部員全員が舞台に集まり、ステージがカラルに染まった。

コーラス部



▲ 見つめる先は正義を勝ち取った未来

コーラス部は「スカレット・ピンパーネル」を上演した。時に困難に遭いながらもパーシーと妻のグリレットが支え合いながら、政府に立ち向かう姿は観客に勇気を与えた。正義を胸に悪と戦うピンパーネル団と、現状に負けず舞台を成功させたコーラス部の姿が重なった。

クッキング部

クッキング部は、「TOY STORY」をテーマに食品展示を行った。入口や会場内は、カラフルな装飾で彩られ、にぎやかなものとなっていた。また、クッキング部は、フォーキーを採せなど、来場者が楽しめる工夫がなされていた。展示されている食品は全て手作りで、レシビが添えられた。どれも美味しそうなものばかりであった。



▲ トイ・ストーリーの世界を料理で表現

家庭部

家庭部では「Among the Sheep」をテーマにした発表を行った。淡く幻想的なドレス十五着が会場を色鮮やかに飾った。装飾も工夫が凝らされ、大変華やかであった。また、ミサンガ、シュシュ、コースターなど、お土産の数を例年より増やし、老若男女が楽しめるようにされていた。



▲ 作ったドレスを前に笑顔を見せる部員

英語劇部



▲ 上映中の様子

英語劇部は、自作の劇を録画し、上映した。今年には講堂での上演が出来なかつたため、部員で動画の構成、撮影、編集を行なうのに苦労したという。映し出された部員の演技に観客は魅了され、大きな拍手が聞こえた。

放送部



▲ 部員のおすすめ番組

今年の放送部の展示はテレビやラジオ、スマートフォンについて調べたことをまとめたものであった。グラフや写真を用いたり、会話形式の文章があつたりして、来校者の興味を引くものだった。

新聞部



▲ 新聞部員がインタビューする様子

新聞部は、講堂発表を行った部活動とハープ部、書道部、聖歌隊、化学部、競技かるた部の雙葉祭当日の様子取材し、速報を掲示した。例年とは違う雙葉祭取材でき、充実したものとなった。

LOOP を テ



▲ 来校者に熱心に説明する部員

山岳部では「秘密基地」をテーマにした展示発表を行った。部員達が来場者一人一人に展示についての説明を熱心に行っていた。山梨県山伏でのソロキャンプのレポートでは、三六〇度VRを用いたことで、来場者も山中で散策しているような感覚になる。部員の自然を楽しむ活き活きとした様子が伝わるレポートは自然の美しさを改めて、実感させるものだった。

山岳部



▲ 福祉施設委託品販売をする部員

福祉施設委託品販売を行なった。マスクやドライフラワー、髪ゴムなど様々な商品を販売していた。今年度は母の会が製作したマスクを販売した。マスクは一枚につき、二〇〇円以上の募金をする事になっている。一つでも多くの商品を生かすため、部員は積極的な声掛けを行っていた。

ソフトテニス部

バレーボール部

バレーボール部では、体育館で白熱した紅白戦が行なわれた。結果は、一回戦目が一九対二十五、二回戦目が一八対二十五で赤の勝利となった。チームごとに声を掛け合い、一丸となってバスを繋ぐ姿に観客は見入っていた。



▲ 白熱している戦い

文芸部

文芸部は、テーマである「スイーッ」に沿った作品展示が行われた。教室全体がピンク色を主とした可愛らしい作品や装飾に彩られた。また文芸部誌「あつとほーむ」が最新号と共に過去十年分を読むことができ、文芸部の歴史に触れることができた。



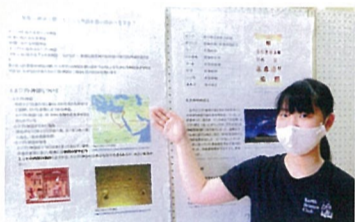
▲ 部員による共同制作

茶道部

茶道部では、例年は和室と四階生徒ホールで生徒や来校者にお手前を披露していた。しかし、今年はコロナウイルス感染拡大防止のため、生徒ホールではお手前に関する映像の放映と、高1生が手作りした和菓子のレプリカの展示を行った。また、和室では高2部員の保護者に対して高2生がお手前を披露し、コロナ禍でも日々の練習の成果を発表することができた。



▲ お手前に集中する高2生



▲ レポートの説明をする部員

地学部では、各部員が興味を持つ星や天体についてレポートにまとめた。例年行なわれていたドーム型のプラネタリウムは密室空間となる為に行なわれず、スクリーンでの解説となった。また、天井の星飾りなどにも力を入れており、見学者を楽しませる工夫が多く施された。

地学部

語学部は、フランスのカフェを再現した展示が行われた。カフェの店員に扮した部員に注文すると、紙粘土で作られた本物さながらの食べ物が出る。お会計は紙で作られたクレジットカードをレジでかざすと、部員の手元にあるiPadから音が鳴り、お支払いできる。教室を出る頃にはカフェにいたように錯覚をしてみようというリアルで楽しい体験ができた。



▲ オリジナルシャツを着る語学部員

語学部



▲ 作品を掲げた部員達

書道部は教室で書道作品の展示を行うと共に、体育館で書道パフォーマンスを披露した。パフォーマンスはコロナ禍で展示作品の作成と練習時間の確保との両立が困難だった。しかし当日は部員が操る大筆の躍動や緊張感ある掛け声が観客を魅了した。書き上がった作品を掲げると、その大きさと迫力に観客からは大きな拍手が沸き起こり、大成功を収めた。

書道部



▲ 本物のような台湾の屋台

今年の美術部は、台湾をテーマに展示を行った。今年は、新型コロナウィルスの影響で、部活動の開始時期が遅く、例年より夏休みも短縮され、合宿も中止になってしまった。準備時間が限られていた。そのような状況の中、部員全員が一つになって作られた作品は、台湾の街をとても忠実に再現しており、コロナ禍でも台湾旅行の気分を楽しめるものであった。

美術部

写真部は教室にて部員が撮影した写真の展示を行った。数々の写真が展示されており、部員が来校者に写真について懸命に説明をする姿も見られた。前黒板には多数の写真を用いて作られた「2020」、窓際には「PHOTO」を模した立体オブジェの撮影スポットが用意されていた。来校者も写真の撮影を楽しむことができるような工夫が見られた。



▲ フォトスポットも充実

写真部

バスケットボール部

バスケット部では例年他校のチームを招いての試合を行っていたが、今年は招待試合はせず、部内での紅白戦を行った。素早い動きと確実なシュートで白熱した試合が展開され、得点が入ることに観客から大きな拍手が送られた。また、試合後には二分間のシュート・フリースロー対決も行われ、こちらも見所となった。



▲ 懸命にボールを追う選手達



▲ 牛車を前に笑顔を見せる部員

日本文化研究部では、「京都」をテーマにした展示発表を行った。平安貴族の乗り物であった牛車は設計から部員が思案し、二ヵ月間かけて制作された。さらに、全長・高さ共に一・六mに亘る大がかりな作品であった。又、紙パックで作成された五重塔は精密な造りで全体のバランスが重視された作品であった。来場者に京都の魅力改めて見せると共に、コロナ禍でなかなか遠出ができない状況の中、京都の雅な世界にいざなうような発表であった。

日本文化研究部



陸上部は、毎年行っていた肺活量測定・握力測定・味覚チェック・アルコールパッチテストなどが行えなかったため、立ち幅跳びの測定を行なった。また部活の普段の様子をビデオにて紹介し、大会の様子などの部の活動がまとめられていた。

陸上部



▲ 上川大臣の熱意のこもった言葉にペンを走らせる

これからの女性活躍社会、私たちはどう生きるべきか

新聞部は本校の卒業生であり、現在法務大臣を務めておられる上川陽子氏にインタビューさせていただいた。

上川大臣と女性活躍社会の歩み

上川陽子法務大臣は、一九八五年の男女雇用機会均等法制定以前に企業に就職、議員当選後は政治分野で、二人のお嬢さんを育てながら、男女共同参画関連の法制度整備に力を入れてこられた。二〇〇三年小泉政権下で決定した「二〇一〇・三〇運動」を進めるため、「ワーク・ライフ・バランス」の憲章と行動指針を策定、さらに大臣・副大臣を務めた際には各省内で女性活躍推進施策を実践・指導された。ジェンダーギャップ指数(GGI)等毎年発表される各種指標において世界に遅れをとる日本、その背景には、長時間労働や家事育児は女性の役割といった社会意識・行動があると考え、二〇一六年には女性活躍推進法を制定、現在男性の育休取得率増加等を推進されてい

る。政治分野では、クォーター制導入により各国の女性国会議員・女性閣僚が増加する中、上川大臣はその解決に向けて、女性のリーダー育成のため女性塾で講演されたり、全国各地議員の女性たちとオンライン対話を行うなど、私達の未来がより生きやすい社会になる為に、努力し続けておられる。

※ワーク・ライフ・バランス
：仕事・家事・育児の調和
※二〇一〇・三〇運動
：社会のあらゆる分野において二〇一〇年(今年)に指導的地位に女性が占める割合を三〇%にするという目標
※GGI
：男女格差を測る指数。日本は二〇二〇年現在世界で百五十三位、百二十一位と過去最低。政治・経済分野で特に低迷している。
※I-P-U
：列国議会同盟、国際平和と国際協力を推進
※女性活躍推進法
：女性にも積極的に働いてもらうための法律。大企業に女性の働き方の具体的なプログラム作成を義務付け、その善悪を公表する。
※クォーター制
：政治において議員候補者の一定数を女性と定める制度。特にアフリカに広がる。

インタビュー

男性にはない女性の強みは何ですか？
今、世界も日本も、多様性と包摂性が求められており、女性の活躍の可能性は無限にある。仕事も、結婚も、出産・育児も、



▲ インタビューした部員と共に

もいろいろな顔をもつ女性、そうした視点を最大限生かすべきだ。女性だからと諦めたり、逃げ込んだりすることなく、大いに挑戦してほしい。

私は、大学卒業後三菱総合研究所に入所した当時、女性の総合職採用の制度がなく、事務職からのスタートだった。仕事は総合職として要求されたため、「女性であるから」と臆することなく、面白さに惹きつけられて働いた記憶がある。どんな立場であっても、努力次第で結果は異なるし、立場もついてくる。少数者だからこそ見える世界を大事にしたい。

現在につながる本校在学中の経験や学びを教えてください。
振り返ってみると、私にとつてかけがえのない六年間であった。壁にぶつかった時、先輩での経験や学び、カトリックの教えが、内なる力になった。皆さんは、無我夢中で学生生活を歩んでいてほしい。法務大臣には、非行や罪を犯す少年たちの更生保護の仕事もあるが、親の愛としっかりとした教育を受けている雙葉生は本当に恵まれていると思う。世界には恵ま

れない子供たちがたくさんいることに思いを馳せながら、学んだことを最大限生かして社会に貢献してほしい。

「双葉生にメッセージをお願いします。」
自分の好奇心を大切に、疑問や問題意識を持ち続けてほしい。その力が社会に出た時、自分で道を切り拓いていく、ひいては多様性と包摂性に富んだ「誰一人取り残さない」社会を築いていくことにつながる。今回のキーワードである「女性活躍社会」は、そうした社会のあり方をイメージしている。男女雇用機会均等法制定から35年、温暖化による気候変動、難民・移民の増加、デジタル化の法の支配等国連の持続可能な開発目標(SDGs)の課題解決が求められている。皆さんの世代こそ解決の担い手であり、今後「女性活躍社会」の中核として大いに活躍していただきたい。

午前	0時	昼食
就寝	1時	打ち合わせ③
	2時	打ち合わせ④
	3時	打ち合わせ⑤
	4時	打ち合わせ⑥
記録	5時	面談
	6時	東京駅へ
	7時	新幹線で静岡へ
	8時	講演会
朝食・自宅で仕事・連絡調整(メールなど)	9時	自宅へ
	10時	夕食
	11時	就寝
	12時	就寝
議員会館へ		
外部の人と面談		
言語へ		
法務省へ		
打ち合わせ①		
記者会見		
打ち合わせ②		
表敬		

▲ 上川大臣のある一日

生徒会長・副会長にインタビュー!

令和二年 度後期生徒会 会長 希望 賢明・向上 という意味をもつ「Peridot」をスローガンに掲げ、活動を始めた。そこで新聞部は、生徒会長と副会長にインタビューを行った。

Q どうして会長又は副会長になろうと思ったのですか。
A (会長) 今までの生徒会や評議委員の活動を引き継ぎながらも雙葉の古き良き伝統を大切に、より過ごしやすい学校を築いていきたいと思ったからです。
Q 生徒へ一言!
A (会長) 生徒会は、生徒が学校を変えることが出来ます。有言実行を信念とし、皆さんの意見を尊重して活動していきます。
(副会長) 生徒会の活動は皆さんの協力が必要



▲ 副会長 小林三月さん 会長 藤田早葵さん

です。学校生活向上を目標に精一杯頑張ります。よろしくお願いたします。

興味を持って読んでくださる皆様の姿を見るのが何より嬉しかったです。今までご愛読下さりありがとうございました。 S・K
昨年度の冬に入部してから、二度の新聞発行に携わることができました。雙葉祭での速報作りや今号の上川陽子氏へのインタビューなど、短い期間で新聞部ならではの貴重な経験ができたことを嬉しく思っています。支えて下さった皆様、今まで本当に有難うございました。 S・I
新入部員として入部してから三年、新聞部部長となりました。責任を感じながらも、日々部員と共に成長していることへの喜びを感じています。また、新しいことに注目し制作していきたいと思っています。よろしくお願いたします。 A・T

考察

平成28年11月の厚生労働省の発表によると、男性は雇用者のほとんどが正規の職員・従業員だ。しかし女性雇用者の約半数が非正規雇用者となっており、未だ女性には社会から様々な制限を受けている。

「生きる」を深めて
高1生は十月十三日、十四日に研修会、十五日に遠足を行った。研修会では二日間市民文化会館へ通い、「生きる」について班で分かち合った。様々な班員達の仲を深め合った遠足

しかし、性別によって社会から受ける制限に感わされ、自ら社会への壁を作ってしまった。例え十分に築いた実力があっても、自身という人間を貫くことはできない。大切なのは環境を嘆くことではなく、自分自身がどう生きたいか、心から「こうありたい」と思える自分はどうな姿かを深く考えることである。その上で、女性を持つ複眼的視点や柔軟性を生かして、一人の人間としての理想へ邁進するべきではないだろうか。

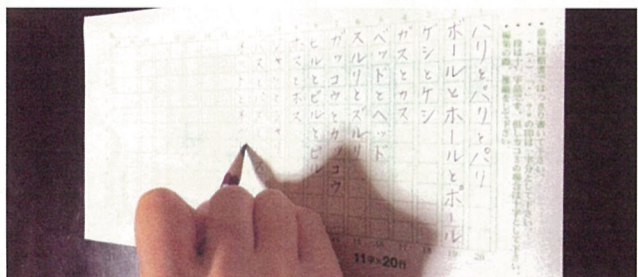
考えを吸収し自分の中で深めることができた。また長崎から山口雅稔神父様、東京からボイストレーナーの宮本さんをお呼びし、「主体的に生きること」や「居場所」について考える機会を得た。遠足では三保と日本平動物園を訪れた。久しぶりの学年での校外行事に生徒達に喜びの表情が浮かんだ。

自分と向き合うことができ、また他者と触れ合う機会を多くもつてきた三日間だった。



▲ 様々な植物を見る中一学生

論より証拠



ゴソゴソ ゴソゴソ
何を 言われてる?
探してる?
言葉の意味と
取り替えて、
自分の心も
取り替える。
濁点の目まじしさよ。
濁点越しの世界で
視点を変えよう。

—Seeing is Believing—